集合住宅の住戸平面計画に関する研究（Ⅲ）

——集合住宅入居者の接客様式について——

新田米子・渥美正子[1)]・佐藤芳美[2)]

Planning the Dwelling Units of Apartment Houses (Part Ⅲ)

——Residents' Reception Styles at Condominium Units——

Yoneko Nitta・Masako Atsumi[1)]・Yoshimi Sato[2)]

Summary

The purpose of this study is to clarify the reception areas and the reception styles of residents at apartment houses. We conducted a survey among residents at condominium units in Nagoya city and the suburbs in Novemver 1992. It can be found that young families who usually receive many visitors and read a positive dietary life receive their visitors directly into their living rooms. Also, they utilize dining tables for visitors service. About 30% of residents entertain formal guests in Japanese-style rooms. Furniture used in such cases is divided into Japanese-style tables and Western-style furniture. Only one Japanese-style room is supplied in these units, however, dual rooms are needed for private or reception areas.

Received Apr. 30, 1994

Key words : Condominium, Life stage, Reception areas, Reception styles, Japanese-style room

1．研　究　目　的

本研究は，家族のライフステージおよびライフスタイルと集合住宅住戸平面との関連性を追究しようとする調査研究の第３報である。第１報[1)]と第２報[2)]では，集合住宅入居者の食生活に焦点をあて食生活スタイルとLDK空間の関係を分析したもので，家族のライフステージおよび食生活に対する積極性と社交性を基軸としたライフスタイル類型がLDK構成の志向にある程度関連を示すということが明らかにされた。しかしながら，LDK空間のあり方については，入居者の食生活スタイルの他に，入居者の接客観や接客様式という視点からの分析も必要であることが前２編の成果より明らかにされた。よって本編では接客という視点から住戸平面の検討を加えることを主眼とする。

1）本学非常勤講師

2）愛知淑徳短期大学

住居は，個人や家族の寝食等の基本的生活行為をより快適で豊かなものとするための空間であると同時にまた，家族以外の他者とのより親密な交流を図るための場としても重要な役割をもっている。ところがわが国の集合住宅は近年住戸規模の拡大化が進んできているとはいえ，独立住宅の平均的な住戸規模に比較するとまだかなりの格差が存在する[3)]。このような住環境で，都市勤労者の多くは，生活時間のゆとりの無さのみならず，住空間の貧困さゆえに，友人・知人等との交流の場を各自の住宅以外に求めているのではないかと推測される。

このような現状をふまえ本研究では，空間的ゆとりの少ない集合住宅において，家族の基本的な生活行為を脅かすことなく，日常生活の中で円滑に接客を行なうことができるための住戸平面のあり方とその空間の室礼に対する人々の指向を明らかにすることをねらいとする。

接客空間のあり方を議論する上で明らかにしなければならないことは多岐にわたるが，集合住宅の場合とくに問題としなければならない点は，接客室の独立性要求の程度，和室指向か洋室指向かの問題，接客室の接客様式（イス座指向かユカ座指向か）等が優先課題としてあげられる。したがって本論では，これらの課題の解決の糸口を探るため，集合住宅入居者の接客実態と意識を事例研究により分析し，今後の集合住宅におけるリビングルームと和室のゆくえを推察しようとするものである。

2．研　究　方　法

集合住宅入居者の接客実態，接客観を探るため，集合住宅入居者（成人女性）を対象としたアンケート調査を実施した。この調査は，本研究第２報の調査と同時期，同対象者としたもので，名古屋市および同市近郊に立地する民間分譲集合住宅２か所で実施したものである。調査方法，調査対象の概要については第２報に詳しいので本報では省略する。

3．結果及び考察

(1)　来客頻度と接客意識

居住者の接客実態を明らかにするため，友人・知人等の親しい客の訪問頻度をみてみる（図1）。尚，本報では回答者（主婦または主婦に該当する成人女性）への訪問実態のみを扱っている。なぜなら，在宅時間が最も長く，住戸内での交流も多くなると想定されるからである。全体では，「よくある」が21.2%，「時々ある」が64.1%となり，８割以上の住居者が住戸内で友人・知人等と交流していることがわかる。ただし，ライフステージによる差がみられ，「長子小学生」世帯での来客頻度が高く，「よくある」が29.6%を占め，「時々ある」も合わせると94.4%に達する。「ない」はわずか5.6%にすぎない。児童期は，ほかのステージと比較して，子どもが媒介となって親たちの人間関係を活発化しやすいステージであるため，必然的に住戸内での交流も多くなったとみられる。従って，特にこうしたス

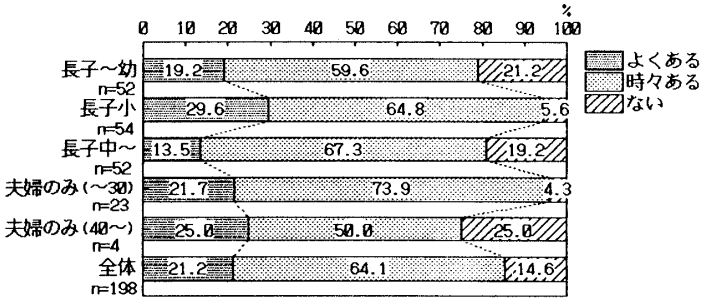

図１　親しい客の来客頻度〈ライフステージ別〉

テージの層にとっては，住戸内に交流の場があることは重要になると言えよう。また，若年夫婦のみ世帯でも訪問頻度が高く，訪問がある層が95.7%を占めている。

次に，接客意識として，客を自宅に招くことについてどのように考えているかを把握した（図2）。全体でみると，「今のままでよい」とする現状肯定層が31.8%であり，住戸内の訪問を好まない層はわずか5.1%，本来住戸内に友人・知人を呼びたいが呼べない層が6割となる。人を呼べない理由として，「住宅が狭い」「時間がない」「子どもが小さい」の3点をあげたところ，前二者の比率が高くなる。こうした意識はライフステージとの関わりがあり，子どもが小さいうちは，「時間があれば」や「子どもが大きくなったら」人を招きたいと考え，子どもが成長した「長子中学生以上」や「夫婦のみ妻30歳代以下」では，「現状のままでよい」とする層と「住宅が広ければもっと人を招きたい」とする層に分かれる。すなわち，大人で構成される世帯ほど，接客において空間的条件にこだわる傾向が強まることがわかる。また，こうした意識と現状との関わりをみたところ（図3），実態として友人・知人の訪問頻度が高い層ほど，現状を肯定する傾向が強く，「よくある」層では52.4%が現状肯定層となる。頻度が低い居住者は，接客が思うようにできない理由として，空間的狭さを指摘する比率が高まる。

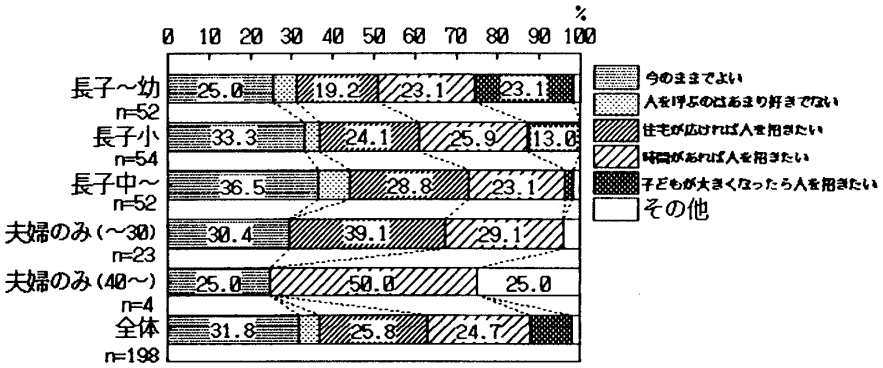

図2　接客意識〈ライフステージ別〉
「客を自宅に招くことについて」

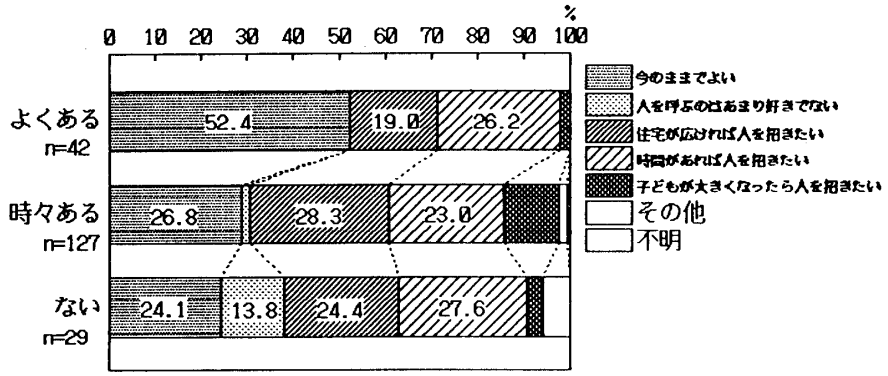

図3　接客意識〈来客頻度別〉
「客を自宅に招くことについて」

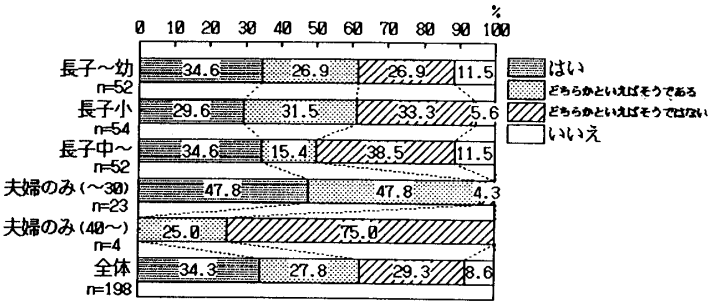

図4　接客意識〈ライフステージ別〉
「友人・知人を呼んで一緒に食事をすることが好き」

今一つ，接客意識として「友人・知人を呼んで一緒に食事をすることが好きか否か」を尋ねると図4のようになる。前述同様，ライフステージによる違いが認められ，「長子幼児以下」（61.5%），「長子小学生」（61.1%），といった低年齢の子どもを持つ世帯や，若年夫婦のみ世帯（95.6%）で好きであるとの回答率が高くなる。特に後者のステージでの肯定率はきわめて高く，子どもがいないことによる

生活の自由さが食事を共にするといった交流をも可能にしていると言えよう。これらの傾向は先に述べた来客頻度と同様の傾向であり，接客に関する実態や意識は，ライフステージとの関わりが大きいことが認められる。

(2)　接客様式

ここでは，接客の場と接客に用いる座家具を取り上げ，入居者の接客様式の現状を明らかにする。

来客の中でも親しい客とやや改まったような客とでは，その接待の仕方が異なる場合が多いと考えられるので，本論では「親しい客」と「改まった客」とに分けて分析を行なうこととする。まず接客の場について述べる。

「親しい客」の場合，全体の90%を占める居住者のほとんどが南面洋室のLDやLDK空間で接客を行なっている（図5）。つまりLDおよびLDKは，これまでの研究報告で述べられている[4]と同様に，家族の食事，団らん，子どもの遊び，家事等多くの生活行為が行なわれており，かつ日常的な接客にも使用される空間であることが確認されたといえる。

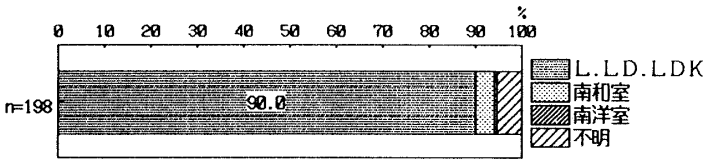

図5　親しい客の接客の場

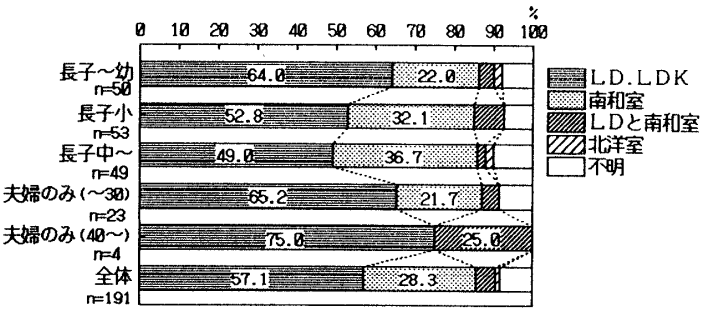

図6　改まった客の接客の場〈ライフステージ別〉

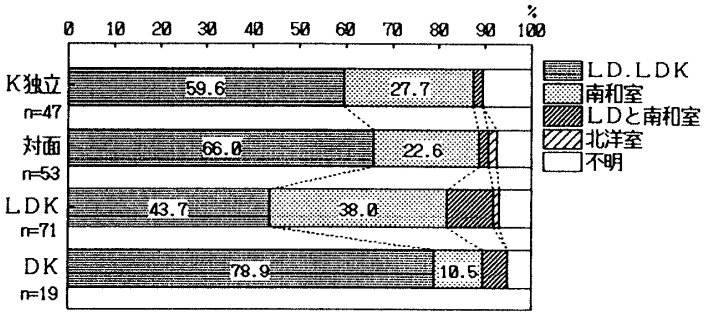

図7　改まった客の接客の場〈現状LDK別〉

一方「改まった客」の接客の場をみていくと，家族のライフステージや現状のLDK構成によって相違が認められ，「親しい客」とは異なった接客の仕方がうかがわれる。すなわち，ライフステージ別では（図6），「長子幼児」や「長子小学校」および「夫婦のみ」世帯で「LD・LDK」での接客が半数以上を占めるが，「長子中学生以上」の世帯になるとその比率は若干低下し「南和室」での接客が36.7%に達することが注目される。

またLDK構成別では(図7)，台所部分がオープンで居間側から台所のちらかりが見えやすい「LDK」タイプで「南和室」の利用が高くなる（38.0%）のが特徴である。したがって「改まった客」の接客の場合は，なるべく家族のプライベート部分から離したいという意向と，子どもが成長し客を迎え入れる側にある程度の時間的また経済的なゆとりが生じるようになると，接客に格式性をもたせたいという意向が強まってくるのではないかと考えられる。

次に客をもてなす時に用いる座家具についてみていく。客をもてなす座家具として「ソファ等のイス・テーブル」(以下「ソファ」と記す)，「食卓」「座卓」「その他」に分類し，ライスステージ，ライフスタイル別で比較を試みた。

まず「親しい客」の場合，全体では53.0%が「食卓」を利用していて，食卓の多目的利用がかなり高まっているといえる(図8)。これをライフステージ別で比較すると，子持ち世帯では大きな差はみられないが，いく分「長子幼児」「長子小学生」の小さい子どものいる世帯で「食卓」利用が高まる傾向がみられる。これに対し「夫婦のみ」世帯では，「ソファ」「座卓」の利用が相対的に高いといえ，子持ち世帯と夫婦のみ世帯とでは親しい客の接客様式に違いが認められる。

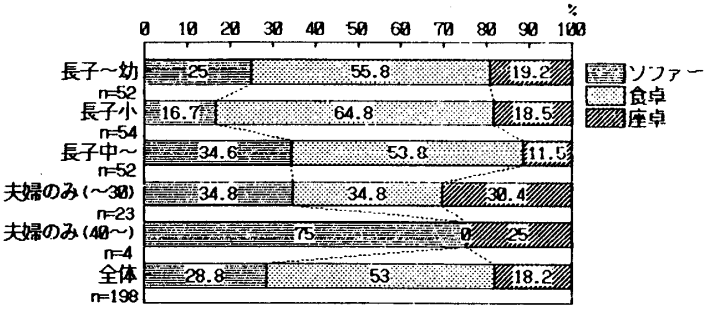

図8　親しい客の接客用家具〈ライフステージ別〉

さらにこれを前報でふれた居住者の食生活スタイルで比較してみると(図9)，「食生活・社交積極型」で「食卓」の利用が63.0%の高率となる。このタイプの居住者は，食生活や社交に積極的でしかも食事空間のインテリアにも気をつかうグループであることから，家族の団らん兼食事空間での親しい客の接待をより自然にできる居住者層ととらえることができよう。

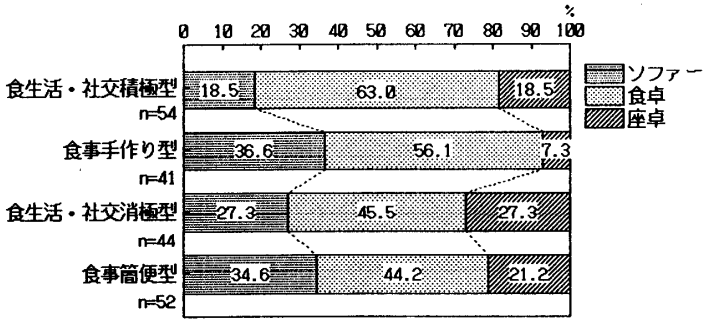

図9　親しい客の接客用家具〈食生活スタイル別〉

このように親しい客を食卓で接客するということが，住戸面積や室数に制約の大きい集合住宅特有の現象なのか，あるいは独立住宅においても同様の傾向が認められることなのかは，本調査からは言及できないので今後の検討課題としたい。

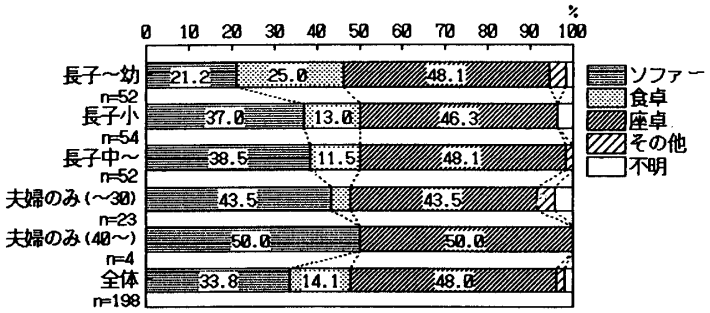

図10　改まった客の接客用家具〈ライフステージ別〉

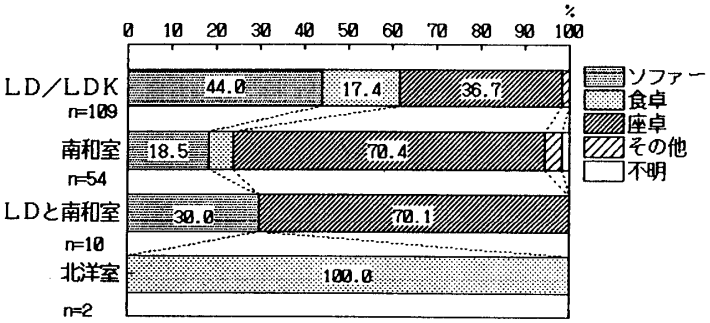

図11　改まった客の接客用家具〈接客の場別〉

また「改まった客」の場合，全体では「座卓」が48.0%，「ソファ」が33.8%，「食卓」が14.1%の順となる（図10)。接客の場同様に親しい客の接客とは異なる傾向をみせている。これをライフステージ別でみると，いずれのライフステージ層においても「座卓」「ソファ」の利用が高いといえるが，「長子幼児」の世帯のみ「食卓」利用が25.0%を占め，他とはやや異なった結果をみせる（図10)。幼児のいる世帯では，育児が中心の生活となり，子どもの遊びのため空間の確保が必要とされ，接客行為よりも家族の日常的な行為を優先せざるを得ないという状況がこのような結果を生み出しているものと思われる。

さらに，改まった客の接客家具を，接客の場別で比較してみると図11のような結果となる。「南和室」

においては，「座卓」の利用が高率（70.4%）となるのは当然と考えられるが，「LD・LDK」での接客においても「ソファ」の利用はそれ程高まらず（44.0%），「座卓」が36.7%，「食卓」が17.4%となる。居間兼食事室である洋室にソファ等のイス座家具を置かずに，座卓を利用する層が予想以上にみられるということは，この空間の広さによる影響も大きいと考えられるが，面積的な理由からだけでなく，イス座家具を用いず床に直接座るユカ座様式が再び評価を得だしていることの表れとも受け取れる[5]。今後，洋室の居間においては，イス座，ユカ座，およびその両様とさまざまな起居様式の展開が予想されよう。

(3)　和室の使われ方と和室希望

対象住宅では，全住戸南面に和室（6畳）が設けられている。入居時にこの和室を洋室に変えたり，あるいは居間との間仕切りを取り除き居間の拡大化を図った世帯は合わせて9世帯であった。つまり大部分の住宅では供給時のままの間取りで生活していることとなる。

この和室がどのように使われているかは，図12に示す通りである。これによると，就寝が最も多く全体の53.5%を占めるが，そのうち「夫婦」と「夫婦＋子」の寝室としての利用が37.3%と多い。ついで「改まった客の接待・宿泊」が34.9%，「洗濯物の整理」が11.4%の順となる。つまり南和室は，大人のプライベート空間として使われるか，パブリックな接客空間として使われるか，居住者特性によってその使われ方が分かれるといえよう。

次に，居室の中で和室がどの程度必要とされるのかについて述べる。居住者全体では（図13），和室を「1室」もしくはそれ以上希望する者は83.3%を占め，依然として和室に対する指向の強さがうかがわれる。

これを家族のライフステージや家族人数で分析すると，前者では（図13），大きな差異は認められないが，「長子幼児」と「長子小学生」世帯で「どちらでもよい」という和室にとくにこだわらない回答を示す比率が15.4%，14.8%と他のライフステージ層よりやや上回るのが特徴といえる。

家族人数別でみても（図14），大差は認められないが，家族人数の多い子どものいる世帯に，つまりライフステージでは上述の若い世帯層に「不要」と「どちらでもよい」の比率がわずかに高くなるこ

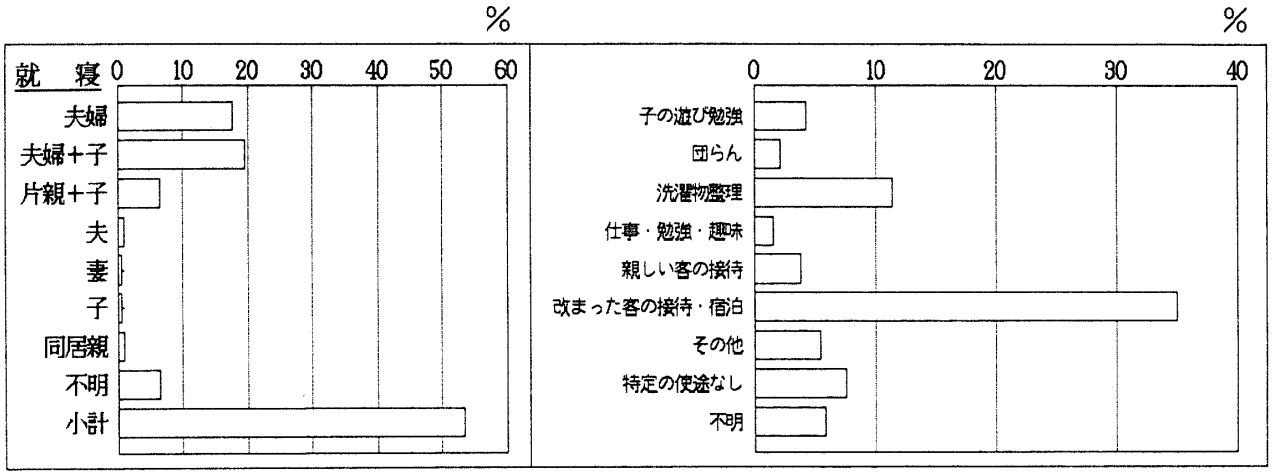

図12　和室（南面）の使われ方（n＝185）

とがわかる。

また，和室をどのような用途に使いたいかは，その希望室数ごとに表すと図15のようになる。和室１室希望グループでは，「来客の宿泊」が53.9%，「来客の接待」が27.0%とその多くが来客用にと考えている。これに対し，２室以上希望グループでは，１室は接客用に他は「夫婦寝室」が56.1%や「書斎・趣味」が12.3%等家族の専用室に使いたいと望んでいて，和室１室を多目的に利用するのではなく，公私の分離を図りたいという意向が読み取れる。

子どもの頃よりベッド就寝に馴染んだ現代の若い世代では，今後も引き続いてベッド指向がつづくと予想されるが，現時点ではまだ畳の上でのフトン就寝を指向する層がそれ程少なくないということが確認されたといえる。

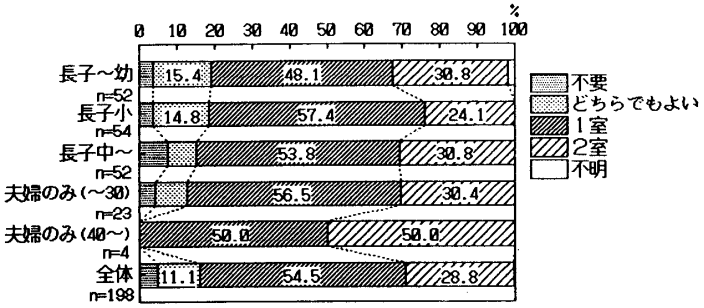

図13　和室希望〈ライフステージ別〉

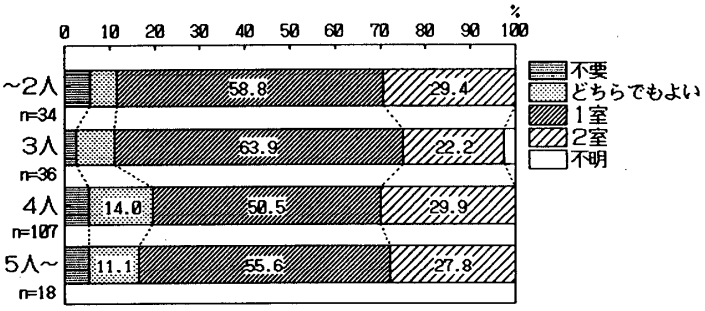

図14　和室希望〈家族人数別〉

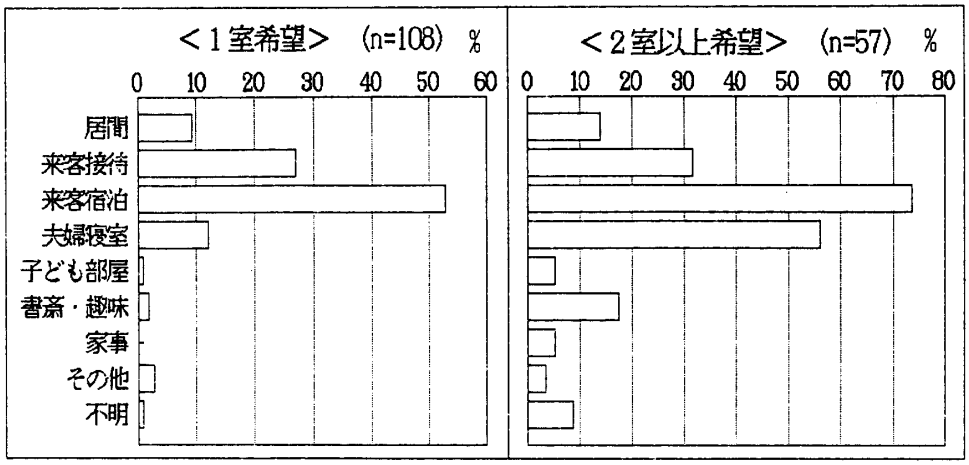

図15　和室の用途希望

4．要　　約

本報告は，集合住宅入居者の接客観・接客実態を通して，集合住宅のLDK空間および和室のあり方を展望しようとしたものである。名古屋市および同市近郊における民間分譲集合住宅２か所における事例調査により次のような成果が得られた。

1）親しい客の来客頻度は，「長子小学生」「夫婦のみ妻30歳代以下」の若い世帯で高くなる。来客が「よくある」と「時々ある」をあわせた比率は，前者94.4%，後者95.7%となる。

2）客を招くことについての意識では，もっと積極化したい層が6割存在する。この理由をみると，子どもが小さい世帯では，「時間があれば」「子どもが大きくなったら」人を招きたいと考え，子どもが成長した世帯では，「住宅が広ければ」といった空間的条件にこだわる傾向が強まる。また「人を呼んで食事をするのが好きである」という意識では，「夫婦のみ妻30歳代以下」と「長子小学生」以下の世帯に肯定率が高く，接客頻度，接客意識ともにライフステージとの関わりが大きいといえる。

3）接客の場は，親しい客についてはほとんどの居住者（90%）が，LD・LDKすなわち居間兼食事室で行なっていることがわかった。

一方，改まった客の場合は，家族のライフステージやLDK構成による相違が認められ，「長子中学生以上」の世帯で「南和室」の利用が高まり（36.7%），間取りではオープンタイプの「LDK」で同様の傾向がみられ（38.0%），子の成長に従い接客室に格式性をもたせようとする意向が読み取れる。

4）接客時に用いる座家具は，接客の場同様親しい客と改まった客とで異なった傾向を示す。親しい客では，半数強が，「食卓」を多目的に利用し，格式ばらないもてなしが目立つ。とくに，この傾向は「長子小学生」以下の子持ち世帯で，また食生活スタイルでは「食生活・社交積極型」で強まり，他の居住者層とはやや異なる接客様式を示すことが認められた。

また，改まった客の場合は，「座卓」（48.0%），「ソファ」（33.8%）での接客が多くなり，「食卓」を用いての接客は「長子幼児」の世帯でわずかに目立つ程度となる（25.0%）。

5）居住者の和室指向は依然として強く，「1室」以上は必要とする者は全体の83.3%を占める。そして和室を「1室」希望する居住者は，その用途の多くは接客用となるが，「2室以上」を希望する者（3割弱）は，接客用と夫婦寝室や書斎・趣味用の家族専用室とに使い分けたいと考えており，公私の分離と寝室は和室でと希望する層が少なくないことが確認された。

以上の結果より，集合住宅では日常的に来客の多い若い世帯を中心に，親しい客の接客は家族団らんの空間で，しかも家族が日常利用している座家具で接待することが一般化していくのではないかと思われる。また改まった客に対しては，格式性や伝統性を重んじる傾向がまだ強く残ると予想され，その場合の和室の存在は大きいといえる。ある一定の地域や一定の居住歴をもつ層においては，日常的生活の場としての和室も若干残るとしても，多くの場合和室は，ますます特別な部屋としての位置付けが大となり，本来和室のもつ融通性を生かした日常生活空間としての存在は薄れていくのではないかと推察される。

最後に，今回の事例調査で解明し得なかった研究課題について付け加えると，接客の場としての和・洋室指向のより詳細な要因分析が必要なこと，また居住歴やライフスタイルの視点からイス座，ユカ座の起居様式についても分析が必要なこと，さらに独立住宅との比較において集合住宅特有の起居様式を中心とした住生活スタイルが存在するのか否かといった課題も残されているといえよう。

註

1）新田米子他「集合住宅の住戸平面計画に関する研究―食生活と L.D.K. の構成について―」聖徳学園女子短期大学紀要 第19集, 1993年, PP. 87-99

2）新田米子他「集合住宅の住戸平面計画に関する研究（Ⅱ）―対面型キッチン志向の入居者特性―」聖徳学園女子短期大学紀要 第22集, 1994年, PP. 135-143

3）S. 63年「住宅需要実態調査の結果」（建設省）によれば, 住宅1戸当たりの平均居室数（全国）は,「一戸建・長屋建て」が6.0室で,「共同建て」は4.1室となり, また一人当たりの平均居住室畳数で比較すると「一戸建・長屋建て」は11.8畳となり,「共同建て」は9.8畳となっている（いずれも持家の場合）。

4）江上 徹「多目的空間として居間の計画に関する研究―コミュニケーション機能を核として―」住宅総合研究財団研究年報 NO. 16, 1989年, PP. 105-120

5）沢田知子「イス坐家具導入過程からみた起居様式の指向性――現代住宅における起居様式の変容過程に関する研究（その1)」日本建築学会計画系論文報告集 第438号, 1992年8月によれば, 首都圏の戸建て住宅における起居様式の指向性の割合は,「イス座指向」が47%,「イス座／ユカ座」30%,「ユカ座」が14%となり, 都市部においてもユカ座とイス・ユカ両様の起居様式指向が低くないことがわかる。

参 考 文 献

中西さゆり他「接客に関する研究 その1 客層分類と接客の実態」日本建築学会大会梗概集, 1988年
中西真弓他「接客に関する研究 その2 接客評価と規定要因」日本建築学会大会梗概集, 1988年
岸本幸臣他「接客に関する研究 その3 改まった客の対応のタイプ化」日本建築学会大会梗概集, 1988年
岸本幸臣他「接客空間の類型に関する研究 その1 空間条件によるプランのタイプ化」日本建築学会大会梗概集, 1991年
中西真弓他「接客空間の類型に関する研究 その2 各プランタイプ別の諸特性」日本建築学会大会梗概集, 1991年
樋口栄作「接客領域と家族団らん領域との領域区分に関する研究」日本建築学会計画系論文報告集 第443号, 1993年1月